

ふ無謀の事をするのかと聞くと、長府の有志の野々村勘九郎（泉十郎）が首領であるといふことが分つたので、桂が野々村を呼んで、懇ねんごうに説諭して、さういふ不心得なことをするものでないといふて忠告し、遂に伊藤の方へ謝罪にやるといふ様なことになつて、事が纏まとつたから、それでは、これから高杉に手紙をやり、井上にも手紙をやつて、呼び返すがよろしからうといふので、伊藤から飛脚を立てることになり、井上は豊後より、先生は讃岐より、相前後して歸國することになつたのである。

天野御民の蝦夷開拓論

天野御民、前名は冷泉雅次郎、長藩歌人冷泉古風の男で、冷泉五郎の弟である。後に大村益次郎に師事し、明治新政府に仕へて裁判官となり、令名があつた。明治八年に防長正氣集を馬島甫仙（松門）と共編した松陰先生の傳記を公にし、またかの松山村塾零話の著者である。この天野に『蝦土開拓論』なるものがある。蝦地の開拓論は舊いことであつて、奇策金策といふてゐるが、さやうなものゝある筈はないとして

今屠卒國毎に五千と見て、六十六國なれば三十三萬人なり。いま之を一時に蝦土に移さんとはとより難し。故にいま其中より十分の一として、一國より五百人都合三萬三千人、強壯にして若年の者を精選し、先づ伊勢に行かじめ大神祠に詣で稜除して平人となし、之を蝦土に移して開墾せしむべし。而して其の衣食は一人毎に玄米一升二合とし、六合は衣に當て、一國五百人、一年の料、二千百六十石宛出税せしめ、之を朝廷より世話して蝦地へ送輸すべし。夫れ一國より二千百六十石、都合日本六十六國より十四萬二千六十石は僅に渺少耳、之をなす、勢ひ難からず。且之を始終といふに非ず、三年或は五年、是は初年は全く與へ、後には半分或は三分の一と、彼の土の開と産の有無とに従ひ、終には目的十分に立てば止て可なり。然るときは屠卒は平人となるを感悦し、踊躍之に赴き奮勵して之を勉め、朝廷には外國に恥ざる義を全くすと謂ふべし。今上（明治）三年十月 長門草莽臣 冷泉雅二郎皇民謹識

と論じてゐる。實に面白い氣付意見ではあるまいか。殊に『伊勢大神に詣で稜除をして平人となす』とある。現時流行の『みそぎ』をさして、心身を清め一洗して心魂を入れ替へ、勇躍北邊の開拓に當らせるといふのである。我等憂國の先人には常にかうした苦心工夫を残してゐる。加之

現時の割當制度で物資の支給をなし、各藩總力を集結してこれを支援して行くといふのである。憂世經國の志士は常にかうした對策を考慮してゐるのである。

著者は曾て北海道開拓使東久世通禰卿が原始林の奥地深く分け入つて、先人未踏の山岳溪流地帯を跋涉し、東西の山河沼澤に足跡を残してゐられることを實地に見聞したことがある。そして黎明日本のその當時に於ける先賢先達の士が如何に萬難辛苦を嘗め盡くして、この北門開拓に當つたかを想起して、轉々感激の涙の禁じ得なかつたものがあつた。

願へば、いまや日本は鮮滿既に一心一體となり、隣邦支那四百餘州また我が權益内に入り、更に大南洋の地、正に我が占據領有の域となる。而して我等大和民族に與へられたるこの後の一大使命は、これ等の疆域をして皇化に慈浴せしめ、東亞永遠の和平と共に、これ等諸民族の民生幸福を進むることにある。然らばこれ等統治先達の重任に當るべき日本國民としては、先人未踏の山野や荒涼不毛の澤江は勿論、或は猛獸毒蛇の蕃地に入り、或は未化殺戮の蕃人を相手に幾難苦の極りを盡くして、聖恩を四海に敷き、皇澤慈雨の仁政を施さなければならぬのであつて、この秋に當つて、かうした憂國先賢先達が苦心遺業の功績を偲びて轉々感慨の盡きぬものがある。

竹島(鬱陵島)開拓問題と桂小五郎

安政五年六月松陰先生は村塾から在江戸の久坂玄瑞に宛て、

竹島爲^ニ英夷有^レこと甚難^レ信候、興膳近日も福原まで申來候、北國船毎々往返、其前後を通船致候へ共、爲^レ何事も無^レ之様子、又英夷既に據れども不^レ苦、矢張開墾を名とし交易をなし、因て外夷の風説を聞くこと尤も妙、英夷既に據れば別而難^ニ差捨^レ候、無^レ左候ては、イツ何時長門などへ來襲も不^レ可^レ測也、寸板不^レ能^レ下^レ海の陋を破ることは是等にして妙策は無^レ之候、黒龍・蝦夷は本藩よりは迂遠、夫よりは竹島・朝鮮・北東邊のことこそ本藩の急に相見候。

と謂つてゐられる。依是觀之は久坂等在江戸門生間にロシアの北邊南下を憂懼して、何れも蝦夷や黒龍江方面に足を踏み入れんとする計畫を立てゝゐたやうである。これに對し、松陰先生は勿論これも急務ではあるが、寧ろ日本としては朝鮮滿洲より更に北支方面に進取態勢を整へ、用意すべきであるとされてゐたものゝやうである。元來、この竹島開拓論者たる興膳昌藏といふものは

長府藩醫、松陰先生とは直接の關係はないが、當時竹島には未だ住民がをらない。早くこれを開拓して日本の領有となすべきであるとの論を有してゐたものである。松陰先生は、これに賛せられて、その實現方につき種々畫策を試み奔走されたのであつた。興膳は文久三年六月、外國船に石炭を密賣した松本濤菴の一味であるといふので、尊攘派の松尾甲之進等に暗殺されたものである。

これは、奇策妙案だ、而かも急を要する問題である、是非實現せしめたいものであるといふので、安政五年二月在江戸の桂小五郎（後の木戸孝允）に書狀を發して

茲に一名利奇男子長府人興膳昌藏と申ものあり、竹島（朝鮮蔚陵島）開墾の策あり、此段得幕許一蝦夷同様に相成候はゞ、異時明末の鄭成功の功も成るべくかと被_レ思候、竹島開墾位は難事に非ざるべし、是一御勘定の主張にて被_レ行可_レ申と默算仕候、委細玄瑞存知之事に付御運籌可_レ被_レ下候（中略）吾藩よりは朝鮮・滿洲に臨むに若くはなし、朝鮮滿洲に臨まんとならば、竹島は第一の足溜りなり、遠く思ひ近く謀るに、是今日之一奇策と覺候、高論何如。

とその實現運動方を桂に委囑してゐられるのである。而かも松陰先生は朝鮮滿洲への進展基地

をこの竹島に求めんとしてゐられることを見逃してはならぬのである。現時の大東亞戦争に於ても陸・海・空・兵站等、何れも基地問題が常に喧くし論議されてゐる。かうした基地理論と併せ考へて、松陰先生のこの主張は一段と興味深きを感じずにはゐられない。

そも／＼松陰先生の考へでは、この竹島問題は實に面白い妙案だ。島中人跡が稀なる上に、良材が多く、また近海からは水産物を多く出してゐる。それに大陸進展の基地としてはこの上もない。幕府に請ふて許可を得た上で、これが開墾に當る。そして朝鮮・滿洲への飛石的進取の基地とする。日本將來の大陸進展の基地、航海雄略の浮城である。福原清介や松浦松洞等の門生達も大いに賛成してゐる。是非これが實現方に付幕府に運動して呉れよといふのが桂への依頼委囑であつたのである。桂は、その事態の重大性に鑑み深慮を重ねて、なかなか容易に着手しかねてゐた様子である。先生は重ねて

竹島論、元祿度朝鮮御引渡之事に付六ヶ敷もあらんと此地にても議申候、併當時大變革之際に御座候得ば、朝鮮へ懸ケ合、于_レ今空島に相成居候事無益に付、此方より開くなりと申遣候はゞ、異論は有之間布、若又洋夷共已に手を下し居候事ならば、尙又難_レ圖、彼が足溜りとならば吾長

州に於て非常の難あり、併已に彼が有と相成候はゞ致方なし、開墾を名とし渡海致候はゞ、是則航海雄略の初めにも相成可申候、蝦夷之事精々論じては見可申候へ共、政府の事態中々夫程の雄志無之、是のみ嘆息之至に御座候(中略)竹島・大坂島・松島合せて世に是を竹島と云、廿五里に流れ居候、竹島計り十八里有之、三島共人家無之候、大坂島に大神宮の小祠有之、出雲地より海路百二十里計、産物蛇魚類良材多く有之、開墾致候上は良田美地も出来可申、此島蝦夷の例を以て開墾被仰付、下より願出航海仕候もの可有之候、とその促進運動を慫慂してゐられるのである。

桂は、その後種々苦心の上、先づ長藩側の態度決定上、重役長井雅樂を説得了解を求め、更に幕府方への運動のために村田藏六(後の大村益次郎)の賛同を得る等、東西奔走、未だ實現化せざる内に、松陰先生は不幸その終末を見ずして江戸に刑死された所であつた。

松陰先生もその結果如何と定めし心残りのされたことであらう。それにもまして桂は残念がつたことであらう。桂は何とかして松陰先生のこの委託を果したい、先生の遺命に背いては弟子の情義が相立たぬとあつて、遂に翌萬延元年六月、大目付久貝因幡守正典(まきのり)にこれを謀つたのであ

る、正典はこれに賛したが、これは勘定奉行の権限であるといふので山口采女(山口直信の妹婿)を通じて、勘定奉行山口丹波守直信の内意を伺ふた所が、これもまた大賛成をした。然し老中の内命を求めなければならぬことになつた。これには桂一箇ではどうすることも出来ない。長藩より正式に幕府に稟請しなければならぬ。その内に時世は刻々變轉して遂に桂等の斡旋も徒勞に歸し、この雄大なる大陸進出基地問題の計畫も空しく寝むるに至つたのである。

竹島開拓運動といふが如き、松陰先生の先見的雄略國策もさることながら、我等後人が最も強く引きつけられ感動させらるゝ問題は、松門の同志、村塾の盟友が、何れも師松陰先生の師説遺命を奉じて一塊の火の玉となり、これが實現化に心魂を捧げて國策樹立に驀進し、或は國家の危難に殉じて行つたことである。この殉義殉國の心魂の結合、精神的總力の結果があつたればこそ、松下村塾の學徒が黎明日本の建設に當り得たのである。いまや大東亞戦争と共に大和民族の肇國精神を世界に宣揚し、八紘一宇の大理想を確立せねばならぬ秋であつて、まさにこの殉國的しんこく心魂力の結集火の玉が最も肝要であると謂はねばなるまい。

亞米利加行計畫の松浦松洞

松浦龜太郎、幼名は溫古。字は知新、後に無窮と改む。號を松洞と云つた。天保八年萩城下松本村船津の魚商庄之助の次男として生まれ、幼時丹靑の技を好み、年十四、甫めて彌西涯の門に入り、その筆意をうけて山水花鳥を善くした。後、松陰先生の教を請ひ、また江戸にある時、久坂玄瑞と共に芳野金陵の門に漢學を修めたのである。既にして經學詩章共に進むに伴れ、飄然その志を新にして、忠孝節義の人物を貌し、彩筆を以て世道人心を補益せんと思念せしも、身商估の家にあるを嘆き、後、根來の臣となり、爾來、久坂義助・中谷正亮・入江弘毅・高杉春風等と相往來し、大いに憂國慷慨の氣宇を涵養したのである。

安政六年五月、松陰先生の江戸死獄に檻送さるゝに當り、家人門生達痛くその訣別を惜しみ、松洞をしてその像を寫さしめたのである。これがいま残つてゐる松陰先生唯一の畫像である。文久二年四月、京都に於て時事を悲憤し、粟田宮御所の後山に登り剖腹して死したのであつて、時年二十有六、贈正五位。

高杉・久坂等と共に江戸に於て活動してゐた松洞は、安政五年九月、在松本の松陰先生に對し、素直に自己の意中を披攤して、左の如く渡米希望の相談を先生に持ちかけてゐるのである。

今度長井敷水野敷に従つて米利堅行果度所存に御座候、此行なれば所見聞或は畫或は記し、隨分益に相成可申と勘考候故一先御相談致候、如何に御座候也。

と謂つて、先づ藩府の許可を得て頂きたい、そして長井・水野への頼みは、やり方一つでは承知しないこともあるまい。在江戸の僚友も心配してゐてくれながら、是非松陰先生の骨折り一つを頼むと嘆願してゐるのである。最もこの問題については相當難色もあつたものゝ様であつて、この手紙の追書として

米利堅行に付ては最早供張之人數相定申候間、自己之金を費やさずしては連行不申候由、僕殆んど是に難澁仕候、如何様思案仕候ても、自分之金を費して行と申事は出來不申候間、是非君公様の御惠を祈るにしくは無御座候、右に付ては小寺・高杉・半井(春軒)諸君、櫻田邸長井君へ御談判被成遣候由に御座候、どうぞ程好く行けかしと日夜案じ居申候云々。

と、恰も子が親にすがりつくやうに松陰先生に嘆願してゐるのである。更にこれに引き續き、

十月十五日付で在江戸の高杉からも

松洞事先達てより亞米利加行之志あり、それ故私共も少々は心を盡し候得共幕府の方にててもヨウシンするの、人のツカヘタノカ、遂に不_レ行候。松洞を亞米利加へやる手段デキイタシマセヌカ、少し後ればせには御座候が何卒心配可_レ被_レ下候様私よりも奉_レ希候。

と、これまた同様、松陰先生に嘆願的相談を試みて松洞を支援してゐるのである。松洞が兄弟子たる高杉を動かしたものであらう。そして弟子兄弟が心を一つにして先生の意中を探り動かさんとしてゐることが、いかにも奥ゆかしく親しみ深さを感じしめずにはをらないのである。

これに對し、松陰先生は先きに久坂に與へられたると同様に、時世は急變し愈々緊迫して來てゐる、いまは日本を離るゝ時ではない、それよりも殉國一途の進撃が大事であるとあつて、高杉に宛て、これ亦『不同意』なりとされて

今の時勢最早墨行と申す時には無_レ之様覺え候、且幕吏に従行の事、上より御願みは勿論不_レ宜、無_レ左様とも、ちと心に落着致兼候、尤も深念ありての事なれば格別、左もなく候へば不_三面白_二候、小生所見如_レ此、松洞へも跡より詳に可_三申遣_二と存候云々(安政五年十一月、高杉宛)

と返書を發してゐられる。松洞にも十分謂つてきかせると云つて、これが中止を求めてゐられるのである。

松下村塾の學徒等が、いかにも海外雄躍の大志雄略に燃え立つてゐた様子が、あり／＼と目につるやうである。要するに、これも松陰先生の大膽・南進論の教導の影響であつて、それに時代的外夷急迫の國狀が拍車をかけたものである。而かもこの間、師説に殉じ、國難に殉じ、外夷の威壓を拂拭して、遠航開國の明朗新日本の建設に、我れ先にと競ひ立つてゐる雄々しくも勇壯なる青年學徒の冲天意氣に打たれずにはゐられない。思へば、一國の青年にこの熱、この力、この意氣があれば、必ず國家は興隆して行く。大東亞戰爭の聖業完遂も、まさにこの種青年の猛進力にあるのである。

振ひ立つた松門同志の雄略

尊皇攘夷と共に開國進取の氣象は松下村塾同志をして、いやが上にも熱狂せしむるに至つた。師松陰先生の教育を奉じ、師説を翳し、號令に従ひ、尊皇大義に殉じ、更に進んで外夷膺懲と共に

に大陸・南進策敢行に挺身せんと振ひ競ひ立つたのが、即ち村塾の學徒であつた。

そこで、大陸。南進問題に關しては、その發足基地として朝鮮問題を解決せねばならぬ。また一方に於ては、在來の漢學一途の殻を破つて、西洋諸學研究の氣運が著しく横成されて、遂に西洋陣法の輸入となり、一度海を航して歐米大陸を踏破し、親しくその文物制度を究めんとするの氣象が濃厚ともなつて來た。従つて北は蝦夷・黒龍江に、東は亞米利加に、西は支那・南洋方面に航かんと企てたものである。そしてこれ等の思索計畫は松陰先生の生前は勿論、刑死された後と雖も、統流して明治新日本へと傳へられ、遂に實を結んで來たのであつて、今回の大東亞戦争の如きも、またまさにその結實の一つの現はれともいふべきことが出来るであらう。

かうした事件は前記數人のみではない。數へ來れば實に枚舉に^{いとよ}遅ないのである。

かの松陰先生の祕藏弟子であり、村塾の俊^{しゅん}傑^{はく}であり、先生は曾つて「八十、勇あり、智あり、誠實人に過ぎ、父母に仕へて至孝なり」と謂つてゐられる前原一誠が、明治九年秋、萩に擧兵した時に、明倫館^{めいりんくわん}に同志を集めて行つた大演説の如き、大いに時弊を衝ひて剴切^{くわいせつ}を極め、殊に彼は血涙を揮つて

韓國にして羽翼成らば、その反覆常なき舊恩を忘れて、我を敵視するに至るや必せり、是れ豈一屬國を失つて、三敵國を得るものならずや、今に於て宜しく問罪の帥を興し、之を我が版圖に復せしめて後可なりである、これ一誠が諫死せんとする所以である。

と絶叫してゐる。實に痛快悲絶の極みではあるまいか。

また、かの奇才奇識と云はれた天野精三郎（後の渡邊齋藏翁）を松陰先生さへ、次のやうに云つてゐられる。

天野、奇識あり、人を視ること蟲の如し、其言往々、吾をして驚服せしむ、一世の高人物なり、恐らくは遂に其の非を知らずして死なん、吾が交遊中に於て暢夫（高杉）・日孜（品川）を除く外、其意に當るべきの者なし、噫、奇識なるかな。

と。思ひ返へせば文久三年五月であつた。伊藤博文（松門）、井上馨等が藩主の内命で海外に脱航せんとしたが、幕禁があるので彼等は深夜斷髮變装して、潜^{ひそ}に三百噸の外船に乗つて出帆し、支那海を渡り馬來を過ぎ、印度洋を横ぎり喜望峰を迂回して、百三十餘日で漸く英京倫敦に着いたのであつた。

かうした同志の刺戟をうけた松門同友達は、何れも一度海外に航せんものと競ひ立つたのも當然のことである。そこで慶應三年七月、天野二十五歳の時、村塾時代の知友であつた木戸や廣澤兵助等が天野の人物を見抜いて、松陰先生の航海遠略の大志を遂げしむるものは天野の外にはない。また天野も是非先生の夙志を繼承して君國に奉ぜんとの堅い決心があつたので、長州藩からの第一回海外派遣生に参加せしむることにしたのである。

天野は、米國ジャーデンマソン會社の世話で、希望に満ち／＼て横濱から船出をしたのであつた。同行は河北俊弼と飯田俊徳とであつて、何れも松陰先生の直弟子である。かくして天野は河北と共に河瀬眞幸をたよつて英國に留學し、飯田は和蘭陀に行つたのであつた。

天野は英京で造船術を研究しつゝも、故國日本のことが朝夕思ひ出されて仕方がない。その中に戊辰戦争の状況が傳はつて來た。天野は憂國熱情黙し難く、河北と謀つて外國の實情を報じ、且つ日本の將來に關する意見を木戸に具陳したのであつた。

とかくする中に、明治六年海外留學生が皆召還されて十二月に歸朝したのであつた。歸國後、天野は木戸の周旋で早速長崎造船所長を拜命し、洋行歸りの嶄新な技術と蘊蓄とを傾けて本邦造

船界に一大貢獻をなしたのである。これが即ち現在の長崎三菱造船所の前身である。

願へば、かうしたことも村塾時代における松陰先生の開國進取論と共に、あの大船巨舶主義で國威を海外に振ふには、どうしても先づ堅艦主義で海軍を擴張しなければならぬ。通商互市にはどうしても海運の隆昌を圖らなければならぬ。それには是非その人材養成と技術の修得とが第一義であるとされた松陰先生の師説そのものゝ影響であることを忘れてはならぬ所である。

更に、また山縣半藏、後の從二位子爵大戸璣、前名は前田辰之助、號は敬宇または潮坪、長幕和議に於ける廣島談判の正使であつて、維新後司法・文部兩大臣となつた人である。松陰先生の兵學門生であつて、先生は曾つて『互に爲二國家二可盡レ力身分なれば何れも商議致度し』と謂つてゐられる程の人物である。

彼は、安政元年三月廿八日江戸を發し、幕府の監察司鈴木某に従ひ、奥羽を経て五月四日松前に渡り、これより漸時北行して、六月初、曾宇耶港(宗谷)に至り『本州之極北であつてカラフトに最も近し』と謂つてゐる。當時風濤荒れこゝに掩留數日、遂に十二日樺太に航してゐる。かくして幾艱難を犯し前人未踏の各地を實査して、同年十一月二十八日江戸に歸つてゐるのであつて、

この間、山川風土は勿論、人情風俗より農水産諸方面迄も調査し、また鄂夷の横行實狀をも探索して歸つたのである。

そして、この向の實情見聞を一々日誌にしてゐるものに『北陲日誌』と『哈喇喇吐略誌』とがある。當時彼が就學してゐた安積良齋がこれに序文して

世衡（山縣の名）能く躍然勇往風濤の陰惡を冒し、巖巖の危峻を躡へ、風餐露宿、往返萬里、天下の怪奇荒幻倬異の觀を極む、苟くも慷慨壯烈の氣、一世に横絶するものに非ざれば、其れ孰れか之を能せん、且世衡の足跡到る所、必ず能く其地理を察し、其風俗を觀、又北虜の情形を窺ふ、其志將に以て、雄藩に忠誠を致し、而して防海の萬一に裨せんとす、豈に騷人逸士、徒に山水の奇を探ると共にすべきものならむや云々。

と謂つてゐるが、まさにその通りであつたことであらう。そしてこの兩著は當時に於て斯界の最大權威であつたのである。

思へば、一世の先達が精魂の限りを盡し、血みどろになつてかうした足跡を印して行く。命限り根限りの心血を注いで、時世に先き立ち國運の前途を開いて行く。その尊き崇高なる心魂力に

刺戟され鼓舞されて、有志の士がそれへくと、その苦心痕の跡を辿つて進んで行く。そしてかうした人心の動向、時代の空氣が漸次蘊釀結成されて濃度を増して來る。遂に神州の正氣が凝つて鐵石となり、鍾つて萬朶の櫻となる。この殉國櫻花の精神力、この鍾成された心魂力が、時世そのものをズン／＼と押し進めて行く。この雄大決河の大勢と熱力とが、その時代をしてその動向に進めて行く。もうかうなつては如何なる偉力も方策もどうすることも出来ない。これが即ちその時代に於ける國の姿であり時世の態勢である。松陰先生はまさにこの烈々熱火の空氣を作り、大志雄略の精神作興を鼓舞され、大陸・南進の國家態勢を作られた一世の先達であり、國家指導の重任に當られた重鎮であつたのである。

—（終）—

昭和十七年十月二十五日 初版印刷
昭和十七年十月三十日 初版發行
(300部)

吉田松隆・大陸南進論
定價二圓二十錢

著者 福本義亮

發行者 小川菊松
東京市神田區錦町一ノ五

印刷者 小林浩齊
東京市板橋區練馬南町一ノ三五三二

印刷所 株式會社日本印刷局
東京市板橋區練馬南町一ノ三五三二

(出文協承認)
ア150233號



發行所

株式會社

誠文

堂新光社

東京市神田區錦町一ノ四六二〇九四番
振替口座東京六一四五六番
會員番號一四五六番

配給元 東京市神田區 日本出版配給株式會社
淡路町2ノ9

HZ 34
- 80

943
111

るす資に養修民國
書の國憂生先本福

吉田松陰の母

福本義亮著 定價 一圓八拾錢
送料 二十一錢

新體制下日本女性必讀の聖典 吉田松陰研究家福本先生が心魂を傾けて描ける殉國士松陰先生の母杉瀧子の全生涯。維新同天の志士が如何なる母の手で育てられたか。偉人を生んだ母の生涯には涙ぐましき刻苦努力があつた。著者は新なる資料のもとに熱意を以て執筆してゐる。現下の日本女性に必讀を奨める書。

吉田松陰の殉國教育

定價 六・〇〇 送料 三三

吉田松陰先生はかの著名な松下村塾に於て至誠を以て門生に臨み大義名分の活教育を施された。本書はその殉國教育を詳細に説かれたもの。一億國民の修養書を詳

結廬孫子評註

定價 三・五〇 送料 三三

孫子は昔から兵書として知られるが、武人のみならず、國家の各方面に活躍する人々に必讀の書。本書は正に活躍した註釋ともいふべきもの。好評噴々！

至誠吉田松陰の最後

定價 三・八〇 送料 二二

盡忠殉國、烈々熱火の如き吉田松陰先生の至情至誠こそ、今や非常時局に際し日本國民はひとしく學ばねばならぬ。本書は松陰研究家として知らる著者の傑著。

訓吉田松陰殉國詩歌集

定價 六・五〇 送料 三三

本書は吉田松陰先生が燃ゆるが如き熱意と愛國至情を以て綴られた詩歌の集大成で、読み方は勿論、時代を説き、出典を明らかにし訓註として完全無比。

人エ3K
-80

誠文堂新光社

終